

小學修身鑑補 卷四

館藏書會育教本日大			
一	九	一	一
冊	號	架	函

257
388

不認定等

K120.1
1
4

K120.1

1

4

吉田利行編輯

版權所有

小學修身鑑補

魁玉堂藏版

小學修身鑑補卷四

吉田利行編

第一 忠義

(一) 臣下ハ忠ヲ以テ君ニ事フルヲ根本トス忠ハ二心ナク君ノ為メノミ思ヒ入り夫々ノ職分ヲ能ク勤メテ我身ヲ捨テ奉公スル徳ナリ 翁問答

(二) 子ノ罪ハ父母ヲ累ハスヨ

(一) 世間第一敬ふべき人ハ忠臣孝子

あり

魏環漢

小學修身鑑補卷四

吉田利行編

第一 忠義

一 臣下ハ忠ヲ以テ君ニ事フ
 ルヲ根本トス忠ハ二心ナク
 君ヲ為メリシ思ヒ入り夫々
 ノ職分ヲ能ク勤メテ我身ヲ
 捨テ奉公スル徳ナリ翁問答

二 子ノ罪ハ父母ヲ累ハスヨ

一 世間第一敬ふ

べき人ハ忠臣孝子

あり
魏環漢

小學修身鑑補

卷之四

醒敬館

久我通基
君ノ過ヲ
頼ハサマ
ル詩

リ大ナルハ莫シ臣ノ罪ハ君
ヲ毀ルヨリ深キハ莫シ後漢書
三北條貞時身ヲ隱クシテ僧
トナリ遠地ニ行脚ス其實ハ
政事ノ得失ヲ伺察スルナリ
一日京城ノ南ニ至ルニ茅屋
ノ人出デ、汲ム者アリ極メ
テ貪穎ト雖其容鄙ナラズ
乃チ入テ乞テ投宿シ終夕語次ス因テ其舊ヲ問フ主人悽
然トシテ曰ク昔嘗テ朝ニ仕ヘ讒ニ逢テ除名セラレ乃チ
今是ノ如シト其曲悉ク問フ即久我源内府通基ナリ客曰
ク何ゾ讒ヲ訟テ其罪ナキ一ヲ白セザルヤ主人曰ク罪ノ

三國法をおそれ守
り上たる人の行ひ
國家の政をまづしる
べからず 家道訓

ボツトキ
ノ僕主ノ
爲メ狼ニ
食ハル語

ナキ一ヲ白スル片ハ即チ讒慝ヲ辨ゼザル一ヲ得ズ讒慝
ヲ辨ズル片ハ則チ君ノ過ヲ顯ハサザル一ヲ得ズ我忍ビ
ザルナリ不徳ノ身祚衰ヘ家亡ブ亦天命ノミ又將夕誰ヲ
カ咎メント
三西洋ノ紀元千七百七十九年ノ冬ゴーントホトツキ其
妻ト共ニ馬車ニ乘リテ埃太里ノ都ウキヤーナヨリクラ
一コーニ赴キシニ途中ニシ
テ一群ノ狼後ヨリ來リケレ
バ從者之ヲ見テ大ニ驚キ逃
ゲ去ルベキ方便モナカリケ
レバ車ニ繫ゲル馬一匹ヲ解
テ狼ニ與ヘ其間ニ乘ジテ遁

三臣の君に事ふる
は子の父に事ふる
が如くす 啓蒙篇

レ去ント圖リケレバ「ポトツキ」之ニ從ヒテ殘レル馬ヲ駈
 リ車ヲ急ガセタリシガ狼ハ馬ヲ食ヒタレ「血」ニ飲ザル
 モ「ユエ」再ビ車ヲ追テ慕ヒ來レリ「ポトツキ」主從ハ危險
 已ニ迫リタレバ厲シク馬ヲ奔ラセ既ニゼートル邑ニ近
 ツク「一里」バカリナルニ悲シヒ哉馬已ニ疲レテ進マズ
 此形勢ヲ見テ群狼益哮リ狂ヒテ競ヒ來リ亦如何トモ爲
 スベカラズ各半死半生ノ思ヒヲ爲セリ時ニ從者號ンデ
 云ク今此危難ニ罹リテ三人此ニ死ンヨリ寧ク僕獨リコ
 コニ止リテ身ヲ彼レニ與ヘ食ハシメン願クハ僕没スル
 ノ後僕カ妻孥ヲ恤ミ養ハン「一」ヲ「ポトツキ」其忠烈ヲ感ジ
 憐ミ暫時猶豫ナシタレドモ勢止ムヲ得ズシテ後事ヲ天
 ニ誓ヒテ彼從者ヲ殘シ車ヲ驅リ遣リケレバ群狼從者ニ

飛ビカハリテ貪リ食ヒシ隙
 ニ「ポトツキ」夫妻ハ僅カニ難
 ヲ免レテゼートルニ達シタ
 リ是ヨリ後常ニ彼從者ノ忠
 ヲ忘レズ契約ノ如ク永ク妻
 子ヲ撫育シ遣ハシケリ
 ④普天ノ下王土ニアラザル
 ハナク率土ノ濱王臣ニアラ
 ガルハナシ 孟子
 ④其國ニ居テ産業ヲ勤メ生
 理ヲ遂グルハ主君ノ恩徳ナ
 ル故ニ扶持ヲ蒙ラザレド臣

④ 君きみの恩おんハ親おやの恩おん
 まひとしく厚あつき恩おん
 おれバ
 親おやノ事つかふる如ごとく心こころ
 をつくして事つかへ奉たてまつ
 るあり 翁問答

下ト云フナリ國ノ仕置法度ヲ能ク守リ其職分ヲ能ク勤メテ年貢公役ヲ懈怠セズ一心ニ國君ヲ畏レ敬フハ庶人ノ忠節ナリ公問答

⑤君ニ事フルニ忠ナラザルハ孝ニ非ザルナリ 禮記

楠正行素性并ニ討死ノ語

⑤建武三年五月楠正成攝州湊川ニ於テ足利尊氏ト戦テ死ス尊氏其忠義ニ感ジ且相識ノ故ヲ以テ其首ヲ家ニ送りケレバ實子正行之ヲ見テ悲憤交々至リ自殺セントセシヲ母打泣キツ、辞ヲ盡シテ之ヲ止メケレバ正行其言ニ服シ滯泣シテ止ミ又其後正行遊戯ヲナスニハ常ニ北グルヲ追フ狀ヲ爲シ且曰ク是尊氏ノ兵ヲ追フナリト或

⑤ かみ 孝を以て君に事 つみか
すなはちちゆう ふれば則忠あり 孝
經

ハ首ヲ斬ル狀ヲ爲シ且曰ク是尊氏ノ首ヲ獲タルナリト造次ニモ父ノ志ヲ繼ギテ國賊ヲ討滅セントヲ志レズ既ニ長ジテ其属隸五百餘ヲ將弁テ住吉ノ天王寺ニ軍ス列伍能ク調ヒ號令法度アリ人皆父ノ判官ニ勞ラズト謂ヘリ進テ細川顯氏山名時氏ヲ討テ大ニ之ヲ敗リ向フ所一モ敗衄ナシ然レモ南朝日ニ衰ヘテ正行遂ニ興復ノ功成ラザルヲ知リ正平四年正月死ヲ決シテ京師ニ迫リシカバ尊氏震懼シテ執政高師直師泰ニ拒ガシム其兵凡ハ方ト號ス正行ノ兵僅ニ三千ニシテ四條磧ニ接戦シ兵勢益銳シ尊氏ノ兵仁木細川等ノ諸將隊ヲ分テ之ヲ防ギケルニ正行大ニ之ヲ敗リ進テ師直ニ迫ル師直ノ臣上山六郎詐テ師直ト稱シ止リテ戦没ス正行其首ヲ獲テ大ニ悦

ビシガ既ニシテ師直ニ非ザルヲ知リ怒テ又進ム師直益急ナリ須々木四郎強弩ヲ以テ正行ヲ射ル箭ヲ被ル一數條正行將ニ斃レントシテ呼テ曰ク已ニナン賊ノ爲メニ獲ラル、一勿レト弟正時ト俱ニ相刺シ北ニ向ヒテ斃ル時ニ年二十二ナリ天下知ルト知ラザルト其忠孝大節ヲ感ゼザルハ莫シ

第二立志

- ① 夫學者百行未ダ立タズ万善未ダ行ハレザル者ハ志ノ立タザルニ由ルナリ自娛集
- ② 學者ハ才ノ及バザルヲ患

① 西諺に曰規を定めざして矢を放つ

こと勿れ

② 學を爲すは當に

志を立るを以て先

とすべし 初學知要

③ 志ある者は事竟

に成る 光武帝

ヘズシテ志ノ立タザルヲ患フルノミ 徐偉長

③ 道近シト雖モ行カザレバ至ラズ事小ナリト雖モ爲サザレバ成ラズ 韓詩外傳

③ 古人ノ志ニ於ケルヤ皆之ヲ一旦ニ立テ終身ニ守ル精神ヲ竭シテ遂ガ達セントス故ニ爲ス所必成就ス 鄧定守

③ 小野道風少キ時書ヲ學ベ氏其技思ハシク上達セザリシガ一日後園ニ散歩シタル

小野道風
蛙、柳條
ニ擧ルヲ
見ル事

時偶々蛙ノ柳條ニ飛ビ上ラントシテハ果サズ又飛上ラ
 ントシテハ果サズ幾度トナク身ヲ躍ラシ居タリシガ忍
 耐ノ力強クシテ後ニハ遂ニ飛ビ移リ思ガマヽニ上リシ
 ヲ見ルヨリ道風大ニ感ジ是ヨリ學ビテ怠ラズ終ニ書名
 ヲ高クセリ

④為シ難キ事ニ會フテ志氣ヲハツム人ハ大業ヲ成ス
 能ハズ為シ難キ事ニ克タン
 ト欲スル志氣アル人ハ決シ
 テ功績ヲ失フコトナシ
 或ル時裁判所ニ雇ハレテ役
 人ノ腰掛ヲ作り別段ニ勉強

クレルク
 五身自裁
 ノ卑ニ腰
 掛ル語

④志立ざれば天下
 に成るべきの事か
 し 王陽明

シテ其板ヲ丁寧ニ削リケルヲ朋輩ノ者ドモ無益ノ手間
 ヲ費ストテ大ニ嘲リタリケルク笑テ曰此板ヲ能ク削
 ルハ人ノ為メノミニ非ズ亦自己ノ為メナリ我等ハ生涯
 ノ中此臺ニ腰掛クベキ身分トナラザレバ死セズトケレ
 ルカ性實能ク物事ヲ勉メテ耻ヲ知り人物重厚ニシテ
 深切ナルニヨリ其為ス所ノ事一トシテ仕損ゼス次第ニ
 獨立ノ生計ヲ為スニ至リ身ノ富ムニ從ヒテ其人品モ自
 ラ立上リ遂ニ其地ノ裁判官ニ任ゼラレ嘗テ自ラ削リタ
 ル臺ニ腰掛クルニ至リタリ
 ⑤煩ヲ厭フハ是人ノ大病ナ
 リ是人事ノ廢弛ナリ功業ノ
 成ラザル所以ナリ 慎思錄

⑤不能の文字ハ獨
 愚人の字書ヲ見エ

李白斧ヲ
針トスル
ヲ見テ立
志ノ語

五唐ノ李白匡山ニ在テ書ヲ
讀ミシガ漸ク怠テ他行セシ
途中一老人ノ斧ヲ石ニ當テ
テ磨キケル者ニ遇ヒ李白止
リテ之ヲ見ルニ其何ノ故ナ
ル一ヲ解セズ近クヨリテ其
次第ヲ問ヘバ老人ハ平氣ニ
テ針トナサントテ磨グナリ
ト答フ李白大ニ其耐忍ノ厚
キニ驚嘆シ感ヲ起シテ再ビ匡山ニ飯リ日夜勉強シ遂ニ
有名ノ詩家トナレリ

ナポレオン
たり
六學を爲すには專
一ならざれば其志
立たず其功成らず
慎思錄

七ワアルレンハスチングスハ元來豪族ナリシガ其家次

ハスチングス
祖先ノ田
圃ヲ買戻
ス語

第二衰ヘテ父ハ貧シキ農民
トナレリ七歳ノ時偶々夏日
ニ當リテ祖先ノ時ニ領セシ
地ヲ過ギ肥田茂林ノ數里ニ
亘リ河流ノ盤環シテ田圃ニ
灌グヲ見テ如何ニモシテ此
田産ヲ恢復セバヤト志ヲ興
シ是ヨリ畝勉業ヲ勵ミ剛毅
ニシテ屈セズ多年ノ間政ヲ
為シ兵ヲ浴メ五千人ヲ統
理スルノ時ニ至テモ其望ハ田産恢復ノ事ノミニ在シガ
許多ノ歲月ヲ經テ巨万ノ財ヲ得遂ニ悉ク先代ノ田地ヲ

七 兎に角に
ものは思はじ
飛彈たくみ
うつ墨繩の
たが一筋に人丸

買戻シテ壯麗ナル家屋ヲ建
築シ官ヲ罷メテ後茲ニ退居
シテ其宿望ヲ全クセシトゾ
⑧志ヲ立ルヲハ大ニシテ高
クスベシ小ニシテ卑クケレ
バ小成ニ安ンジテ成就シ難
シ天下第一等ノ人ト為ラン
ト平生志スベシ 大和俗訓

⑧志を立るは勇猛
なるべし柔弱に
て怠るべからず
ヨワク

大和俗訓

⑧高速ニ至レ然レモ須ク先ツ一步ヨリスベシ 西語
⑧人事百般都ベテ遜讓ヲ要ス但志ハ即チ師ニ讓ラズシ
テ可ナリ又古人ニ讓ラズシテ可ナリ 言志晚錄
⑨人ハ艱難ニ遇ハザレバ則其筋骨ヲ苦シムルヲ能ハズ

名取彦兵衛
製糸器
機ヲ工夫
セル語

又其志ヲ成スヲ能ハズ 謙虛
⑨名取彦兵衛ハ甲府ノ紙商
ナリ嘗テ謂ラク我邦ニ於テ
蠶糸ヲ製スルニ巨多ノ人カ
ヲ費シテ而シテ粗惡ノ品ノ
ミヲ多ク産スルハ是國産ノ
聲價ヲ墜シテ蠶業ニ損失ヲ
致ス所以ニシテ即富國ノ道
ニ非ザルナリト戊辰以來其
舊業ヲ廢シ思ヲ凝シテ製糸
器械ヲ創造シ之ヲ試験スル
ニ一旦ニシテ其器械尚精良

⑨壯にして怠れば
時を失ふ老いて懈
れば名譽あし
ホマレ

呂氏春秋

⑩君子は世を没へ
て名の稱せられざ
ホマレ

るを疾む

論語

ナラザレバ之ヲ改造スルノ
 數次ニシテ爲メニ多クノ金
 錢ヲ費シ殆ド其家産ヲ傾ケントシケレハ比鄰之ヲ聞テ
 或ハ痴ト呼ビ或ハ狂ト稱シテ其迂拙ヲ嗤笑スレモ彦兵
 衛敢テ屈撓セズ其家人等モ破産ヲ憂ヘテ舊業ニ復セン
 一ヲ勸ムルニ亦之ヲ聽カズ愈奮勵シテ止マザル故親族
 ハ交ヲ絶チ其家幹等ハ暇ヲ請フニ訖レリ然ルニ彦兵衛
 尚屈撓セズ庚午ノ年ニ及ビ終ニ蒸氣ヲ使用シテ製糸ヲ
 乾ス一ヲ發明シ是ヨリ極メテ精良ノ糸ヲ製スル一ヲ得
 テ其價額モ亦進ミシカバ縣廳ヨリ其破産ヲモ顧ミズ國
 益ヲ興サン一ヲ計リ刻苦數年ニシテ此精良ノ器械ヲ製
 セシ一ヲ朝廷ニ上聞セシカバ之ヲ嘉賞シテ金圓ヲ下賜
 セラレタリ

⑩ 今日ハ明日ノ計ヲ爲シ今月ハ來月ノ計ヲ爲シ今年ハ
 來年ノ計ヲ爲シ平生ハ一生ノ計ヲ爲シ生前ニ於テ早ク
 死後ノ計ヲ爲スベシ怠ルベカラズ 大和俗訓

文天祥卿
 祠ヲ見テ
 事ヲ起ス

① 宋ノ文天祥ハ如ナカリシ片學官祠ル所ノ郷先生ニ歐
 陽脩楊邦義胡澹菴等ノ像皆忠節ト謚セルヲ見テ欣然ト
 シテ之ヲ慕ヒテ曰ク人歿シ
 テ此等ノ諸賢ト共ニ祭祠セ
 ラル、ニ至ラザレバ大夫ニ
 非ザルナリト後果シテ忠義
 ニ死シテ其名ヲ千歳ニ輝カ
 セリ

豹は死して皮を

留め人は死して名

を留む

王彦章

⑤美名ニハ暗中ニモ猶光輝アリ 西諺

第三 愛日

①大禹ハ聖人ナレ 尺寸陰ヲ惜メリ 衆人ニ至テハ當ニ分陰ヲ惜ムベシ 豈ニ逸遊荒醉ス可ケンヤ 陶侃

①丈夫世ニ處ルハ即甚タ壽キモ百年ニ過キズ 百年中ニ老稚ノ日ヲ除ケバ世ニ見ハルハ實ニ三十年ニ過ギザルナリ 此三十年ニ其人ヲシテ泰山ヨリモ重カラシムベ

①およろこび 凡いとほし幼いきより勤つとめ學まなぶに暇いとまを惜おぼむべし 大和俗訓

ク 鴻毛ヨリモ輕カラシムベシ 高景逸

羅山除日 講延ヲ 起ス語

③歲暮ニ得菴羅山ニ謂テ曰ク 余未通鑑綱目ヲ讀マズ 請フ 先生明春ヲ以テ余ガ爲メニ之ヲ講セヨ 羅山曰ク 子心誠ニ之ヲ求メバ 何ゾ來年ヲ待タント 即除日ヲ以テ講ヲ起セリ 又嘗テ人ニ邀ヘラレテ 祇園神會ヲ觀ントス 適一諸生棠陰比事ヲ袖ニシ來リ 其義ヲ問フニ 羅山一々之ヲ

② 今日學まなばずして來日らいありと謂いふこと

勿なれ

今年學まなばずして來日らいありと謂いふこと

勿なれ

古文眞寶

説キ辱既ニ移ルヲ知ラズ遂ニ會ヲ觀ザリシトナリ

②人生百歳ニ満タズ豈ニ放蕩ニシテ日ヲ曠クシ空ク斯

ノ生ヲ過ス一ヲ惜マザルベケンヤ 慎思錄

③人ノ一生ニ享クル所ノ光陰幾バクゾヤ之ヲ愛惜スル

ヲ知ラズ浪リニ費セバ終ニ

禽獸ト異ナル一ナシ造物ノ

人ニ賦スル所豈ニ徒ニ五体

ヲ具ヘテ天地ノ間ニ喘息シ

蟲蟻ト並活セシムル而已ナ

ランヤ 陳獻章

③天地萬古アリ此身再ビ得

③西諺に曰今日の
後今日なし又曰
時のある時は時を
得よ

キ易シ 菜根譚

③閑話ヲ説ク一勿レ恐クハ光陰ヲ費サン雜書ヲ觀ル一

勿レ恐クハ精力ヲ分カタシ 朱子

④人ノ命ハ限リアリ延ヒテ長クシ難シ限リアル命ノ内

光陰ヲ惜シミ樂ミテ月日ヲ

送ルベシ暫シガ間モ益ナキ

一ヲ為シ僻事ヲ行ヒ樂マズ

シテ空ク過ス可カラズ 樂訓

⑤頼山陽八九歳ヨリ好デ古

來ノ軍記ヲ讀ミ寢食ヲ忘ル

ルニ至ル既ニ句讀ヲ授クル

ニ及テ晝夜懈ラズ早く雄邁

頼山陽勉
學ノ話

④少年老い易く學
成り難し。一寸の光
陰軽んず可からず

古詩

俊偉ノ志氣ヲ抱ケリ年十三ニシテ一詩ヲ賦シテ曰ク

十有三春秋

天地無始終

安得類古人

逝者已如水

人生有生有死

千載列青史

年十四五ニシテ小學近思錄皆已ニ誦習ス遂ニカヲ文章ニ肆ニシ最モ史學ニ精シ即史ヲ著シ文ニ托シ以テ後世ニ垂レントス終ニ能ク日本外史政記等ノ大著作ヲ成セリ山陽名既ニ一時ニ重シ四方ノ人多ク來テ見ントテ求ム一切謝絶シ已ムヲ得ザルニ非レバ見ズ常ニ門生ニ謂テ曰ク我ヲ才子ト謂フハ未ダ我ヲ悉クサバル者ナリ我ヲ能ク刻苦スト謂フハ真ニ我ヲ知ル者ナリト夜ハ則燈ヲ挑ゲテ書ヲ讀ミ五更ニ至テ後寢ニ就ク朝タニハ則テ

起テ自ラ衾裯ヲ收メ戸牖ヲ

掃ヒ以テ常トス寒暑トナク

一ナリ政記ハ最モ晩年ノ作

ニシテ記事多ク病中ニ成ル

一日病革ナル時曰ク我死既

ニ逼レリト然レ猶眼鏡ヲ著

ケテ政記ヲ手ニシ刪潤止マ

ズ忽チ左右ヲ顧ミテ曰ク且

ク喧キ一ナカレ我將ニ假寢

セントスト乃筆ヲ闕キ眼鏡

ヲ脱セズシテ眠ス就テ之ヲ

撫スレバ則述ケリ時ニ年五

五 盛年重ねて來ら

ず一日再び晨かり

難

時に及で當に勉勵

すべし歲月人を待

たす 陶詩

十三

⑤世上ノ財貨ハ空シク消耗スト雖モ後日ノ儉約ニ由テハ之ヲ償フコトヲ得ベシ然レドモ誰カ能ク今日失フ所ノ光陰ヲ明日再ビ取り得ル者アラシヤ

⑤萬ツノ事初メニ苦勞セズシテ怠レバ後ニ功成ラズシテ樂ミナシ譬ヘバ苦ガキ藥ヲ飲メハ後ニ無病ノ人トナルガ如シ若カキ時辛勞スル

人ハ老イテ後樂ミ多シ大和俗訓
⑥書ヲ讀ムコトハ少年ノ氣力強ク暇アル時能ク勤ムレバ大ニ進ミテ益アリ大和俗訓

⑥若カキ時苦シンテ勉メ學禮記
ばさん勤勞らうして成り難

ベバ一生ノ間老後マデノ樂ミトナル若カキ時徒ニ日ヲ過セバ一生ノ間愚ニシテ身ヲ終ハル家道訓

⑥宋ノ范純仁ノ子正平幼ニシテ勤苦學ヲ好ム嘗テ外氏ノ子弟ト課ヲ覺林寺ニ結ブ城ヲ去ルコト數里ナルニ正平常ニ敗扇ヲ以テ日ヲ障ヘ徒歩シテ往來ス人其宰相ノ子タルヲ知ルコトナシ

第四 信義

①言ノ言タル所以ハ信ナレバナリ言テ而シテ信ナラザレバ何ヲ以テ言トセン教果

②西諺ニ曰ク信任ハ成功ノ

①ことば辭まことは必信まことにすべし
しかり假初つひにも詐いつはりるべ

友ナリト

三 數百年前ニムールト名ツ

クル人種スペイン國ノ一部ヲ領シタル頃一日スペインノ一貴人一ムール人ト争フテ遂ニ之ヲ殺シ直ニ逃レテ一ムール人ノ家ニ投シテ匿サレシヲ乞ヒタリムールノ俗ニ共ニ物ヲ食スル後ハ死ヲ相契ルヲアリ時ニ主人スペイン人ヲ助クル信證トシテ共ニ飲食シ一室ニ匿シ置キ夜ニ至ラバ他所ニ逸シ遣ルベシト約シタリ且ラクノ彼ノスペイン人が殺シタル人ヲムール人相鼻シ至ルニ此殺サレタル人ハ即其家ノ子タリ主人乃彼スペイン人ハ我子ノ仇タルヲ知レ既前約ヲ違ヘズ夜ニ及ンデ駿馬ヲ與ヘテ之ヲ逸セシメントシ將ニ別レントスルキ

からず 大和俗訓

ムール人
西班牙人
ヲ助クル
信義ノ語

初メテ告テ曰ク我子ヲ殺シタルハ汝ナリ我此罪ヲ討スベキナレ既已ニ汝ト食ヲ同フシ約ヲナシタレバ敢テ之ヲ破ラズ夜ニ乘シテ遠ク逸シ去リ難ヲ免レヨタトヒ汝ハ我子ヲ殺シタル罪アレ既我汝ヲ殺ス罪ナキヲ喜ブ且約ヲ破ラザルヲ大ニ謝スルナリト

三 若シ其契約義ニ適ハザルカ又ハカノ及ビ難キトニテ

二 人と約を爲さば

必其約を固く守る

べし

一たび約を違へば

人に非ずと思ふべし

大和俗訓

シヨ
ン
藍
桃ヲ取
ラ
ガ
ル
話

後ニ約ヲ守リ難カラント思ハツカネテ約ヲ爲ス可カラ
 不輕々シク受合ヘバ其約違フ慎ムベシ 大和俗訓

三 米國ニシヨント謂ヘル童子アリ一日朋友ト野外ニ行
 キ遊歩セシ時路傍ニ桃實ヲ盛リタル籃アルヲ見ル朋友
 シヨシテ其一顆ヲ取り來ラシメントスシヨシ頭ヲ
 掉リ肯ゼズシテ曰ク縱令ヒ微物ナリト雖モ是亦人ノモ
 ノナリ今其無キヲ時トシテ
 之ヲ取り去ルハ即盜賊ナリ
 ト會々一人ノ農夫來ルアリ
 大ヒニシヨシカ正直ナルヲ
 賞シテ籃中ノ桃實數箇ヲ與
 ヘタリ

三 善ぜんに非ひざる人に
 は交まじはらず。義ぎに非
 ざる者は取らず

倭小學

餓人黄金
ヲ拾フテ
取ラザル
話

三 我身ノ爲メニ便利ヨク或
 ハ財ヲ得祿ヲ得ルニアリト
 モ只義ノ在ル處ヲ思フベシ
 利ヲ貪リテ義ヲ忘ルベカラ
 ズ 五常訓

四 京都ニ餓人アリ黄金ヲ路
 ニ拾ヒ主ヲ訪テ之ヲ還ス主人曰ク子餓テ貨ヲ拾フ是天
 ノ賜フ所ナリ而シテ敢テ取ラズ潔行氷ノ如シ然リト雖
 モ中心之ヲ欲スルヲ無キヲ得ンヤ餓人笑テ曰ク吾レ不
 幸ニシテ餓死セントス豈天命ニ非ズヤ命ニ背テ物ヲ取
 ルハ塵芥モ且ツ不可ナリ况ヤ黄金ヲヤト

五 宋ノ會某子二人アリ長ヲ由ト曰ヒ次ヲ基ト曰フ由ノ

四 其誼ぎを正ただふて
 其利りを謀そらず 董仲舒

會基煙ヲ
誨ンテ家
ヲ興ハ詰

子其放蕩無頼ニシテ家ヲ嗣

ガシムベカラザルヲ以テ遂

ニ之ヲ放逐ス其死セントス

ルトキ家産ヲ基ニ讓レリ然

レ基モ亦之ヲ私有スルノ

心ナク時ヲ待チテ從子ヲ搜

索シ前非ヲ悔悟セシメテ父

ノ家産ヲ返サント思ヘリ或

人從子ノ在ル處ヲ告グ其處ニ到リ從子ニ謂テ曰ク汝ハ

一旦父ニ逐ハレタルモノニテ我ニ於テモ叔煙ノ義絶エ

タリ然レモ亦汝ノ困迫スルヲ見ルニ忍ビズ汝克ク我家

ニ來リ園ニ灌ガン歟ト從子曰ク若シ食ヲ得バ勞ヲ厭ハ

ズト因テ伴ヒ歸リテ園ニ灌ガシメ數月ノ後復ビ庫ヲ管

ラシメシニ謹慎ニシテ怠ルコトナシ基彼が過ヲ改メシ

ヲ知り兄ヨリ受ケタル財産ヲ悉ク從子ニ返シ且之ヲ愛

スルヲ已ガ子ノ如クス是ニ於テ從子深ク先非ヲ悔イ心

ヲ改メテ一郷ノ善士トナリ基ヲ見ルコト父ノ如クナリ

五 利は共にすべく

して獨すべからず

利己に専おれば怨

必集まる

畜徳録

五 人ト交ハルニ人ヲシテ其財ヲ費サシム可カラズ

六 家業ヲ能ク勉ムレバ利養ハ求メズシテ其中ニ在リト

六 義を行ふて自ら

来る利ハ真マコトの利しんか

り 大和俗訓

用ヒテ能ク作り商ハ交易ヲ
勤メテ偽ラズ高利ヲ取ラズ
四民共ニ此ノ如クナレバ強
ガチニ利ヲ貪ラザレバ福祿
ハ自ラ來ル勤ムベキ業ヲ正路ニ勤メズシテ僻事ヲナシ
利ヲ貪ル者ハ一旦ハ人ニヨリ倖アリト雖モ後ハ必禍アリ
家道訓

ミランノ
老大金ヲ
拾ヒタル
話

〔六〕ミランニテ大家ノ守門ノ老夫一日二百圓ヲ盛リタル
囊ヲ拾ヒタリ老夫直チニ呼子ヲ雇フテ金主ヲ搜索シ之
ニ還セシニ金主三十圓ヲ老夫ニ謝禮セシカバ老夫辭シ
テ曰ク我只此務ヲ爲シタルノミ何ノ謝ヲカ取ラント金
主減ジテ十圓ト爲ス又受ケズ又減シテ五圓トス猶受ケ

ズ金主大ニ困シテ金囊ヲ地ニ投ゲ叫ビテ曰ク嗚呼此金
我が有ニ非ズ我復此金ヲ何如シトスル能ハズト爰ニ於
テ老夫遂ニ五圓ヲ受ケ後ニ之ヲ貧人ニ施シ與ヘタリ

第五 慎事

① 患ハ常ニ照察ノ及バザル
所ニ伏ス過ハ常ニ思慮ノ周
カラザル所ニ生ズ 真西山 語
① ソノ始メヲ慎ミソノ終ヲ
惟ヘバ終ニ以テ困シマズ其
終ヲ惟ハザレバ終ニ以テ困

① 凡事皆當みかまに始め

を慎つみ終りを慮おもんる

べし 薛文清

窮ス書經

②後悔少カラシテ思ハバ
常ニ思案ヲ好シテ妄ニ事ヲ
好マザルベシ事ヲ好メハ事
多クナリテ過多ク悔多シ

大和俗訓

③凡事ノ成ルヤ必之ヲ敬ム
ニ在リ其敗ル、ヤ必之ヲ慢
ルニ在リ荀子

③懼ル、ハ福ノ原ナリ忽セ
ナルハ禍ノ門ナリ 事新語

③明ノ大祖嘗テ侍臣ト善惡

大祖善惡ノ報ヲ論スル事

ノ報或ハ爽ガフ者アルヲ論ズ曰ク惡ヲ爲スモ或ハ禍ニ免カル然レ理ニ於テ爲スベキノ惡ナシ善ヲナスモ未ダ必ズシモ福ヲ蒙ラズ然レ理ニ於テ爲ス可カラザルノ善ナシ彼ノ善ヲ爲シテモ福ナク惡ヲ爲シテモ禍ナキ天道ノ不明ニアラズ特ニ時未ダ至ラザルノミ

⑤徳ヲ修ムル者ハ細行ヲ慎ミ治ヲ圖ル者ハ未然ヲ憂フ

胡敬堂

⑥一語一黙一坐一行事大小

②患は忽せにする

所より生じ禍は細

微に發こる 後漢書

③細行をつゝま

ざれば終に大徳を

累らばす

④西諺に曰淺疵も

多ければ死に至る

又曰一年善ならざ

れば七年の患を招

トナク皆苟モスベカラズ之ヲ處スルニ必其方ヲ盡スベシ 薛文清

⑥若シ急ナル事アラバ殊更善ク思案シテ詳ニ行フベシ急ギテ心躁ガシク靜ナラザレバ思案ナクシテ必誤アリ 悔アリ 大和俗訓

⑥晋ノ趙簡子子二人アリ長ヲ伯魯ト云ヒ幼ヲ無恤ト曰フ簡子嘗テ訓戒ノ辭ヲ二枚ノ簡ニ書シテ二子ニ授ケテ

無恤 趙簡子
ヲ懷中ス
ル話

曰ク謹ンデ此ノ辭ヲ識ルセト三年ノ後簡子二人ヲ招キテ之ヲ問フ伯魯ハ其辭ヲアグルコト能ハズ無恤ハヨク其辭ヲ誦シ且ツ其簡ヲ求レバ之ヲ懷中ヨリ出シテ父ニ獻ズ因テ無恤ヲ以テ嗣ト定メタリ

⑦堯ノ戒ニ云ク戰々慄々日一日ヲ慎メ人山ニ躓ク一ナクシテ埳ニ躓ク是ノ故ニ人皆小害ヲ輕ンジ微事ヲ易リテ以テ悔ル一多シ 淮南子

⑤君子は始めを慎む

差ふこと若し毫釐

釐かれば繆るに千里を以てす 易緯

⑥細事と雖も亦當に難きを以て之に

處すべし 讀書錄

處すべし 讀書錄

⑦千丈の堤も蟻

の穴を以て潰ゆ 韓非

小治政身臨補 卷之四 星 效 録

レバ安ンズ失敗スル者アランヤ讀書録

⑧兩葉去ラザレバ將ニ斧柯ヲ用ヒントス六韜

⑧病起リテ藥ヲ服センヨリ無病ノ時能ク養生スレバ病ナシ家道訓

養珠院朝花ノ返書ニ教訓ヲ寓スル事

⑧徳川頼宜勇武絶倫ニシテ其行事豪猛ノ事多シ而シテ復時ニ灑然トシテ喜ブベキ者アリ嘗テ牽牛花一盆ヲ其生母養珠院ニ贈テ曰ク朝間ノ花午ヲ過ギテ猶榮フ一榮ニ供スル所以ナリト養珠院之ニ答ヘテ曰ク朝花ノ贈リモノ奇觀喜ブベシ抑モ人ノ壽モ猶此花ノ如シ苟モ其養

⑧病なき時能く養生すれば病起らじ家道訓

ヲ得レバ短キ者モ亦之ヲジテ長カラシムベキナリ即家國ヲ養フモ亦此心ヲ以テ之ヲ視バ國祚何ゾ長カラザルヲ患ヒンヤ答謝ノ次デ聊カ之ニ及ブト大槻盤溪此事ヲ評シテ曰ク南龍公兄弟十一人中ニ在テ最モ健康ニシテ壽ヲ保チ七十餘齡ニ至ル豈克ク母氏ノ慈訓ニ服スルノ致ス所カ
⑨人多キ處ニテハ人ナキ心ニテ事ヲナスベシ人ナキ處ニテハ人多キ心ニテ事ヲナスベシ古語
⑨君子ハ未然ニ防ギ嫌疑ノ

⑨患なきの時にあたりて豫じめ之を防げば終に患なし初學知要

八世傳金神
卷之四
星
文
館

間ニ處ラズ瓜田ニ履ヲ納レズ李下ニ冠ヲ正サズ 文選

第六 謙遜

① 滿ハ損ヲ招キ謙ハ益ヲ受ク 書經

③ 英國ウエルフ州ニ「ボルホルド」ト云フ商人アリシガ損毛打續キケレバ片田舎ニ移リ住ミテ節儉ヲ守リシニ漸ク仕合セヨクナリテ再ビ商業ヲ企テシテ欲シ金主ニ

ボルホルドノ女高言父ノ不幸ヲ來ス語

① 凡^{たゞ}朋儕^{とも}の中^{なか}に在^あては切^{せつ}は自滿^{じまん}を戒^{いまい}む 許魯齋語錄

② 常^{つね}に人に謙^{うづ}りて

吾^わ身を誇^{ほこ}る可^べからず 文訓

示談シテ或ル商人ト社ヲ結ビ大利ヲ獲ンテヲ樂ミ居タリボルホルドニ一女アリ年甫メテ十六ナリ一日此女乗合馬車ニ乗リシトキ同車セシ者三人アリ其一人女ニ問テ曰ク君ハ何レニ住居シ玉フヤト女曰ク妾ハウエルス州ノ豪農ナリト其家屋ノ宏大ナルヨリ下女下男ノ多キヲマデ口ニ任セテ詐リ語り又然ルニ同車ノ二人ハ曾テ女ノ父ニ金ヲ貸シタル者ナレバ前キニ零落ヲ口實トシテ其返償ヲ延バセシハ果シテ我等ヲタバカリシモノヨト大ニ憤リ遂ニ社ヲ結ビタル人ニ告ケレバ其不正ナルヲ惡ミボルホルドニ書ヲ寄セテ結社ノヲ謝絶セリ此

小學修身監輔 卷之四 三十一 星 文 館

時^レホ^ルホ^ルド^ハ病^ミテ家^ニ在^リシガ此^事ヲ辨^解セント
 テ苦^痛ヲ忍^ビ出^テ行^キケレ^レ疴^ニ堪^ヘズシテ或^ル旅^宿
 ニ息^ヒシガ病^ハ益^甚シクシテ暫^ク茲^ニ逗^留セリ會^結社
 セシ人^商用^{アリ}テ此^家ニ宿^セシガ旅^人ノ病^メルヲ聞^キ
 其^容體^ヲ尋^子シシニ^ホル^ホル^ドナ^リケ^レバ大^ニ驚^キタ^リ
 ホ^ルホ^ルド^ハ娘^ノ虚^言ヨ^リシ^テ信^ヲ失^ヒシ^テ君^ノ家
 ニ至^テ陳^謝セント來^リシ由^ヲ語^リケ^レバ其^人ノ疑^念
 モ晴^レ金^ヲ與^ヘテ療^養ヲ盡^セシニ^ホル^ホル^ドハ幸^ニ病
 ハ愈^エケ^レレ^レ結^社ノ事^ハ其^機會^ヲ失^テ遂^ニ安^樂ノ日^ニ
 逢^ハザ^リシトゾ

② 賢者ハ己ガ知^ナキヲ知^リ
 愚者ハ自^ラ知^アリト思^フ
西 諸

③ 吾能^{のう}に矜^{ほこ}るは耻^{そが}

③ 我身ニ如何ナル善行アリ
 トモ口ニ出シテ誇ル可カラ
 不^レ其^才能^ニ矜^レバ其^才能^ヲ
 失^ヒ其^善行^ニ矜^レバ其^善行^ヲ
 失^フ
大和 俗訓

なり、吾不能^{のう}を飾^{かざ}る
 も亦耻^{そが}なり 畜德^録

④ 自^ラ銜^ヒ自^ラ矜^ルハ名^ヲ
 貪^ルノ事^ニシテ又^名ヲ喪^フ
 ノ基^ナリ實^ヲ務^メテ自^ラ謙
 スルハ名^ヲ忘^ルハノ事^ニシ
 テ又^名ヲ得^ルノ基^ナリ
慎 思 録

④ 名^のを好^{この}めば實^{じつ}を
 失^みひ自^{みづか}ら讚^ほめて却^{かへ}
 て名^のを失^なふ 初學^訓

傲慢ノ少年益軒ニ話
 惹ッル話

④ 貝原益軒嘗テ京師ヨリ歸^リ路^ヲ海^上ニ取^ル同^船ノ者
 數^人中^ニ一^少年^{アリ}意^氣傲^然頭^ヲ掉^リ舌^ヲ鼓^シ經^義ヲ

八世修身録
卷之四
星
文
館

講ズ益軒沈黙竦聽シ字ヲ知ラザル者ノ如シ既ニシテ船
岸ニ達シ各其姓名郷里ヲ告グ少年其益軒タルヲ知り大
ニ慚ダ遂ニ其姓名ヲ陳セズ鼠竄シテ去ル
⑤人ト相處ルノ道第一謙下誠實ヲ要ス同ク事ヲ幹セバ
則勞苦ヲ避ルル勿レ同ク膳寢セバ則牀席ヲ占ムル勿
レ揚椒山遺屬

程普周瑜
ノ徳ニ敬
服スル語

⑤吳ノ周瑜大名アリ程普其
年長セルヲ以テ數周瑜ヲ侮
ル周瑜節ヲ折リテ之ニ下リ
終ニ與ニ校セズ普後ニ自ラ
敬服シテ曰ク周瑜ト交ルハ
醇醪ヲ飲ムガ如シ覺エズ自

⑤謙遜を以て人に
接はれば以て過寡
かるべし 薛文清

陶院久我
同日ニ大
臣トナリ
シ時ノ語

ラ酔フト時人以謂ラク其謙讓人ヲ服スル此ノ如シト
⑥人譽ムルニ我謙スレバ又一ノ美ヲ増ス自ラ誇レバ自
ラ敗ル又一ノ毀リヲ増スナ
リ呂新吾續小兒語
⑥我善大ナリト雖モ隱シテ
自ラ譽ムベカラズ人ノ善ハ
小ナリト雖モ顯シテ譽ムベ
シ初學訓
⑦自ラ讓レバ則人愈服ス自
ラ誇レバ則人必疑フ 願雅集
⑦閑院實行久我雅定ノ二人
同日ニ大臣ニ拜セラレシ時

⑥自ら卑くして人
を尊び彼を先にし
て已を後にす 小學
⑦功天下に被ふる
ものを守るに讓を

小治政身法補
卷之四
二十三
星
文
館

一人ノ官吏アリテ赴キ賀シケルガ先ヅ實行ノ許ニ至ルニ門外ニ車馬填咽シ第中ニ入ルニ士女盛服シテ賀客ヲ待チ意氣甚得タリ良久シクシテ主人出デ、接シ歡話時ヲ移シケリ次ニ雅定ノ許ニ至ルニ門外閑寂タリ頓テ中門ニ入レバ狗ノ跡ノミアリテ門者ヲ見ズ人ニ請テ名刺ヲ通ジケルニ主人鹿服ヲ着テ謁者ト共ニ出デ、曰ク殊更ニ來ラル、ハ今日余が大_ニ臣トナルヲ賀センガ為メカ此任極メテ重クシテ恐クハ不肖ノ堪フル所ニ非ズ何ゾ賀スルヲセントテ蕭然タル有様ナリシカバ其人慶スルニ由シナクシテ退キ大ニ二公ノ静躁ノ殊ナルヲ歎ゼリ

以てす

家語

一人ノ官吏アリテ赴キ賀シケルガ先ヅ實行ノ許ニ至ルニ門外ニ車馬填咽シ第中ニ入ルニ士女盛服シテ賀客ヲ待チ意氣甚得タリ良久シクシテ主人出デ、接シ歡話時ヲ移シケリ次ニ雅定ノ許ニ至ルニ門外閑寂タリ頓テ中門ニ入レバ狗ノ跡ノミアリテ門者ヲ見ズ人ニ請テ名刺ヲ通ジケルニ主人鹿服ヲ着テ謁者ト共ニ出デ、曰ク殊更ニ來ラル、ハ今日余が大_ニ臣トナルヲ賀センガ為メカ此任極メテ重クシテ恐クハ不肖ノ堪フル所ニ非ズ何ゾ賀スルヲセントテ蕭然タル有様ナリシカバ其人慶スルニ由シナクシテ退キ大ニ二公ノ静躁ノ殊ナルヲ歎ゼリ

第七 安分

○天地生ズル所ノ財物ハ固ヨリ以テ人ノ用ニ供スルナリ然レモ必程能クシ安ニ費サズ愛惜セヨ 胡師蘇

○一粥一飯モ當ニ來處ノ易カラザルヲ思フベシ 治家格言

○土井利勝一日漢絲ノ零尺

許ナルヲ近臣大野仁兵衛ニ付シテ曰ク汝謹ンデ之ヲ藏メヨト衆其鄙吝ナルヲ笑フ利勝置テ問ハズ三年ヲ經タリ偶利勝腰刀ノ緞解ケタリ仁兵衛ヲシテ往キニ付スル

○費を省き奢を抑へて家財の分限に應じて用ふべし 木下

家道訓

大野仁兵衛
片絲ヲ藏
メ加祿セ
シ詔

所ノ漢絲ヲ持チ來ラシム仁兵衛直チニ之ヲ腰袋ニ取リ以テ呈ス利勝手ヅカラ其絲ヲ以テ刀緘ヲ約シ欣然トシテ微笑シテ曰ク無用ノ用今ニシテ驗アリト遂ニ其宰寺田某ヲ召シテ曰ク吾甚ダ仁兵衛ノ謹愨ニシテ主命ヲ重ンズルヲ嘉ミスソレ祿三百石ヲ増シ與ヘヨ抑モ漢絲ノ物タル彼國ニ在テ桑婦蠶繅辛苦ノ手ニ成リ展轉運輸シ渺々タル碧水ヲ航シ以テ我地ニ入ル其人ノ勞力ヲ經ル幾許ヅヤ則チ尺寸ノ零餘ト雖臣徒ニ之ヲ塵芥ニ委スルハ是レ天物ヲ棄ルナリ吾恒ニ之ヲ畏懼ス而シテ仁兵衛之ヲ守テ失ハザルハ之ヲ天ニ事フル者ト謂フ可キナリト輒チ戯レテ曰ク一尺ノ絲三百石ノ祿ヲ博ス獲ル所亦多シ鄙吝ヲ笑フモノハ之ヲ如何ト視ルヤト

① 飲食衣服家居器物ナド我が身ノ分ヨリ輕クスルガ能キ程ナルベシ身上ニ相適ヘリト思フハ分ニ過キタルナルベシ只親ヲ養フハ本ニ報スル道ナレバ我身ヲ忘レテ財ヲ惜ム可カラズ 家道訓

其舟師遺金ヲ拾フテ金主ニ返ス語

② 其舟師ハ餘子ノ人ナリ或ル一人ノ商家アリ其舩ヲ雇ヒテ餘子ヨリ瑞洪ニ渡リ金囊ヲ舟中ニ遺シテ去リ又舟師之ヲ見テ商賈ニ返サント欲シ我子ニモ語ラズ深ク藏シテ其來ルヲ待ツニ其子ハ之ヲ知ラズサレハ舩ヲ出シテ餘子ニ飯ラントセシヲ舟師鬼角シテ時ヲ移シヌ既ニ

② **分に過ぎて福を**
求むれば返す禍を
まね **招く**
かへつ
 傳家寶

小學修身金箱 卷之四 四

シテ商賈來リテ金ヲ尋子ケレバ舟師喜テ之ヲ返シケリ
商賈喜悦ノ餘其半ヲ與ヘントセシヲ辞シテ受ケズ去リ
ス其子恨ミテ曰天ノ與フル宝ヲ取ラザルハ何ゾ畢竟斯
ル愚ヲ為スヲ以テ遂ニ貪苦ヲ免レザルナリト父笑テ曰
ク我父子終日舩ヲ棹スト雖モ宝ヲ得ルハ難シ然ルヲ
今カヲ勞セズシテ之ヲ得バ何ゾ安穩ナルベキト斯ク正
直ナルヲ以テ後家富ミ榮エ
タリ

本多正統
祿ヲ貪テ
罪ヲ得ル

三 本多正信世々徳川氏ニ仕
ヘケルガ嘗テ子ノ正統ニ謂
テ曰ク吾死スルノ後公若シ
汝ノ封地ヲ益ス一三万石ニ

三 足るとを知る者は
貧賤なるも亦樂む
は貧賤なるも亦樂む

過グレバ汝必受クル一勿レ
若シ大邑ヲ受ケテ辞セザレ
バ禍必及バント其後正統封
ヲ宇都宮ニ受ケテ十五万石
ヲ食ミケルガ未ダ幾バクナ
ラザルニ罪ヲ得テ由利ニ誦
セラレ

足るとを知らざる者は
富貴なるも亦憂ふ
者は富貴なるも亦憂ふ

四 農ハ歳ノ凶ニ遭ヒテモ怠ラズ耕作ニ專一ナレバ自ラ
生業ヲ得工ハ器ヲ精ク作りテ粗糲ナラザレバ必其利ヲ
得商ハ詐ナク正直ニシテ利分ヲ少ナク取レバ諸人ノ信
愛厚ク頼モシゲアリテ必商
物多ク賣ル、故利ヲ得ル

四 家の業を能く勤
家の業を能く勤

小臣参事監輔 卷之四 二十六 星 友 信

多シ 大和俗訓

四「ペロザート」ハ天性信實

ノ入ナリ其幼キ時ハ甚貧シ

カリシガ工場ノ丁稚トナリ

テ其職業ヲ勉メ百事皆節儉

ニセシカバ後ニ家頗ル富ミ

テ代議士ニ選舉セラレ、ニ至レリ然レモ猶貧キ時ノ如ク儉約ナルガ故ニ益富有トナレリ常ニ曰ク吾富メルハ吾産業ノ大ナルニ由ルニ非ズシテ吾需用ノ小ナルニ由ルナリト

五「飲食ハ飢渴ヲ養フニ止マリ衣服ハ寒冷ヲ凌グニ止マリ家屋ハ風雨ヲ防グニ止マル華美風流ヲ好ムヘカラズ

ルナリト

五「衣食住は事多節約にすべし。是徳の本なり子孫長久の基なり」
悟窓漫筆

北條時頼
味噌ヲ嘗
メテ酒ヲ
酌ム語

五北條時頼儉素ヲ以テ稱セ

ラル一夕其族宣時ヲ招ク至

レバ則自ラ一壺酒ヲ挈ゲ出

デ、曰ク偶々此物アリ獨リ

酌ムベカラズ聊カ復迎ルノ

ミ恨ムラクハ下物ナシ厨下

或ハ餘食アラン君ヲ煩ハス

唯自ラ得ル所ノマ、ナリ宣

時乃燭ヲ秉リ厨ニ入り徧ク索ムルニ有ナシ僅ニ度上ノ土器中ニ殘醬アルヲ見ル因テ試ニ取テ至ル時頼曰ク亦足レリト乃チ暢然トシテ對酌シ遂ニ歡ヲ極メケリ

通教

一民ハ三ニ生ズ之ニ事フル一ノ如クス父之ヲ生ミ師之ヲ教ヘ君之ヲ食ナフ父ニ非ザレバ生マレズ食ナヒニ非ザレバ長セズ教ニ非ザレバ知ラズ 晉語

一父母ニ孝ナク兄ニ悌ナク君ニ忠ナク師ニ敬ナク友ニ信ナキモノタトヒ万卷ノ書ヲ誦シ多能多藝ナリトモ何ノ用ヲカナサン日新館童子訓

一孝弟忠信ノ身ニ在ル一猶金玉寶貨ノ室ニ在ルガ如ク擴メテ之ヲ已ニ行フ一猶發シテ之ヲ人ニ施スガ如シ豈美ナラズヤ放棄シテ求ムル一ヲ知ラズ埋藏シテ用フル一ヲ知ラザルハ是誰ノ過ヅヤ省心雜言

一君ニ事ヘテ暇ナキ人父ノ家ニ在テ孝行ニ暇ナキ人官

職ヲ預ル人藝術ノ家業アル人此四等ノ人ハ心ヲ清クシ事ヲ省クヲ宗トシテ差當リタル職分ヲ勤ムベシ事ヲ好ミ物ヲ玩ブ可カラズ事ヲ好ミテ暇ヲ費セバ我身ニ差當リタル職分ノ勤メニハ必疎クナル家道訓
一人賢ニ非ザレバ交ハル莫レ物義ニ非ザレバ取ル莫レ事善ニ非ザレバ説ク莫レ謹ム片ハ憂ナク忍フ片ハ辱ナシ静ナレバ常ニ安ク儉ナレバ常ニ足ル 醒世格言

小學修身鑑補卷四終



小學修身 第四卷 星文館

1201

明治二十年二月八日版權免許

同 年六月 日刻成

福岡縣士族

編輯人

吉田利行

福岡縣福岡區福岡濱ノ町二十二番地

同縣平民

出版人

右田喜久郎

同縣同區博多掛町十一番地

小學修身 第四卷 星文館

